

(2) シイタケ菌の生態

シイタケ菌は次のように分離される。

菌界 - 真菌門 - 担子菌亜門 - 真正担子菌綱 - 帽菌亜綱

- ハラタケ目 - キシメジ科 - シイタケ種 (edodes)

(ヒトヨタケ科 - マツタケ種) 今関 六也菌学会元会長説

シイタケ菌がどのような生物でどのような性質を持った菌類であるかを知ることが、シイタケ栽培にとって大切である。

① シイタケ菌の性質

シイタケ菌の生活過程の生態から、色々な名前では呼ばれており、この呼び名の性質を知って科学的な栽培を行うことが大切である。

- ・ 死物寄生菌
- ・ 木材腐朽菌
- ・ 好気性菌
- ・ リグニン分解菌
- ・ 酸性腐朽菌
- ・ 湿性腐朽菌
- ・ 好日性菌

② シイタケ菌の成育と温度

シイタケ菌は、3 - 4 度でもわずかに生長しているが、普通 5 度から生長を開始し、24 - 25 度で最高の生長に達する。一般にシイタケ菌は低温に体する抵抗力が強く、高温に対する抵抗力は弱い。致死温度は、45 度で10分間、40 度で30 - 60分間であり、35 度でも長時間さらされた場合は死滅する。(図3)

③ シイタケ菌の生育と水分

シイタケ菌の生長するのに必要な水分は、生長する基材によって異なる。シイタケ菌が最もよく生長する鋸屑培地の水分は、60 - 65%である。シイタケ原木内における生長可能水分は25 - 47%であり、最適範囲は、クヌギ原木で35 - 40%である。(図4)

④ シイタケ菌の生育と水素イオン濃度

シイタケ菌は、弱酸性でよく生長する菌である。生長可能範囲は pH 3 - 9 である。最適 pH は、4.5 - 6.5 である。(図5)

⑤ きこの発生と生長温度

きこのに生長する菌糸塊が、完成したきこのの形となって生長し、樹皮を破って発生する温度は、菌糸の最適生長温度 (24 - 25 度) よりも低い温度であり、シイタケの発生適温は品種によって異なる。また、シイタケの生長温度もそれぞれ品種によって異なる。

⑥ きこの形成に関する各種の条件

きのこ形成と温度については前記したが、その他にも成熟生長への分化する要因となるのは栄養生長を抑制する因子が主体であり、その各種因子は次のとおりである。

- ・材分解によって生じる栄養分の菌体内蓄積と分解過程に生じた有機酸の蓄積（成熟したほだ木）
- ・生活環境外温度の刺激（高温に対する感受性の強い物 - 秋品種、低温に対する感受性の強い物 - 春出品種）
- ・ほだ木含水率の低下（水不足による菌糸生長の抑制）
- ・過水分による材中酸素の欠乏（浸水、吸水の効果）
- ・光線（陽光面へのきのこの発生。赤外線が最も有効と考えられている。）
- ・炭素率の低下（ほだ木内の炭素源が消費され窒素量が増加すると生長が抑制される。）
- ・生活環境の急激な変化
- ・打木（吸水の促進効果？） カミナリ（通電ショック？）

以上のとおりきのこの形成に関する因子は数多くあるが、これらの因子は単独で作用するのではなく複合的に作用するものと考えられている。

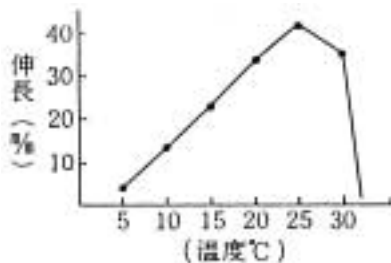
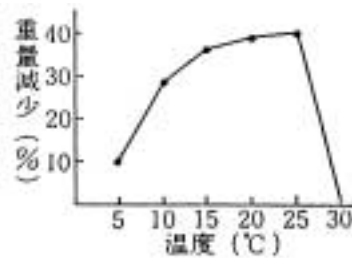


図3 成長と温度



材分解と温度

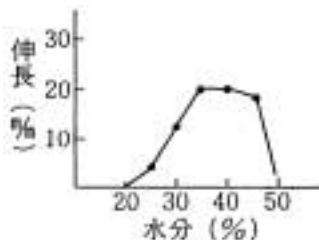
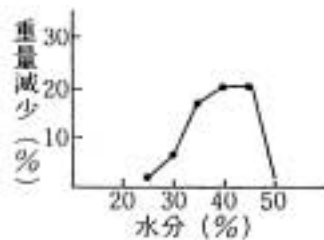


図4 原木水分と生長



原木水分と材分解

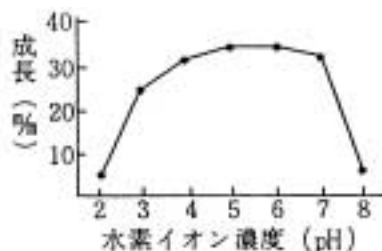


図5 菌糸の成長と水素イオン

2 原 木

(1) 原木の選定

木材の腐朽菌であるしいたけ菌糸が繁殖できる樹種は多い。しかし、原木として経済的に利用できる樹種は限られている。原木選択の条件は、第1に好んで菌糸が発育し、きのこがよく生える原木である。第2は、その地域で多く得られる原木で、しかも経済的に有利な樹種でなければならない。

ア 樹 種

(ア) 最適樹種

クヌギ、コナラ、ミズナラ

(イ) 適樹種

シデ類、ナラカシワ、ノグルミ、アベマキ、クリ、カシ類、シイ類

(ウ) その他

ヤマザクラ、イタヤカエデ、ヤシヤブシ、その他の広葉樹種

イ 樹 齢

クヌギ、ナラ類などは、老齢樹は適当でない。シイ類、カシ類など樹皮の薄い樹種は老齢樹がよい。

(ア) 原木に適する樹齢

① 10～25年生ぐらいが適当とする樹種

クヌギ、コナラ、ミズナラ、ナラカシワ、ノグルミ、アベマキ、クリ

② 30年生以上が適当とする樹種

シデ類、シイ類、カシ類

(2) 原木の伐採

ア 適期伐採の条件

(ア) 樹皮の剥離しない時期

(イ) 樹体内に貯蔵養分の多い時期

(ウ) 紅葉が鮮明な時期（常緑樹を除く）

イ 伐採の適期

伐り時期は、しいたけ栽培上大切な技術の一つとして扱われている。時期は秋、葉が黄く変り始めた頃から、翌春の芽が動き始めるまでの期間であるが、適期は、秋伐りが最もよく、冬、春伐りがこれに次ぐ。特に、クヌギ、ナラ類は秋伐りが望ましく、例外として、シイ類カシ類は寒伐りが成績がよい。

(ア) 樹種別の伐採適期

表1 原木の伐採適期

伐採時期 \ 樹種	クヌギ	コナラ	ミズナラ	カシ類 シイ類	シデ類
黄葉初期から3分黄葉 (10月上~11月上旬)					
4分黄葉から7分黄葉 (11月中~11月下旬)					
寒 期 (1月~2月上旬)					
春 期 (2月中~3月上旬)					

老齢木は黄葉初期に伐採する。 ...最適期 ...適 期

これは標準であって場所、その年の気象条件などで、若干差が生じる場合がある。

(ア) 伐採の時の注意事項

- ① 木を伐り倒す時根元に割れを作らない。
- ② 15年生以上の木は、できるだけ枕を敷いて、地面に根元をつけない。
- ③ 葉枯しなど条件をよくするため、できるだけ上向きに伐倒する。
- ④ 伐倒の時、すでに害菌や穿孔虫などの侵入を受けている被害部は取り除く。

(3) 原木の乾燥

原木の乾燥は、生木の原木から水分を脱水させ、均一な乾燥をはかることが目的であるので、伐採した場所で、一定の期間葉枯しをして、生木重量の85~90%に乾燥する。(常緑樹は除外)

ア 乾燥期間

原木の乾燥期間は、伐採してから2~3ヶ月ぐらいが適当である。期間は、伐採地の地形や環境、樹種、原木の大きさ、気象条件などを考慮して定めるが、一応の目安は表2のとおりである。なお、常緑樹のシイ・カシ類は乾燥させないことが肝要である。

表2 原木の乾燥標準日数(伐採から玉切りまで)

樹 種	樹 齢	乾 燥 日 数
クヌギ	10 ~ 15 年 生	60 日 位
	15 年 生 以 上	100 日 位
コナラ	10 ~ 14 年 生	50 日 位
	15 ~ 25 年 生	60 日 位
	30 年 生 以 上	100 日 位
ミズナラ シデ類	15 ~ 25 年 生	90 ~ 120 日 位
	30 年 生 以 上	60 日 位
シイ・カシ類	25 年 以 上	

樹種、樹齢、標高、方位等により原木の乾燥日数も異なる。

イ 原木材組織の生死とシイタケ菌糸の生長

シイタケ菌糸は、死物寄生菌であるため、立木や生木に近い状態の木には侵入しない。原木を適度に枯死、乾燥させてから植菌することが大切である。(表3)

表3 生状原木の死滅処理とシイタケ菌糸の生長度

品 種	樹 齢	材の死滅処理原木*		無 処 理 原 木**	
		含 水 率	シイタケ菌糸 の 伸 長	含 水 率	シイタケ菌糸 の 伸 長
A	コ ナ ラ	39 - 42(%)	100 - 105(mm)	39 - 40(%)	12 - 37(mm)
	ク ヌ ギ	39 - 42	100 - 105	39 - 42	6 - 12
B	コ ナ ラ	39 - 42	93 - 105	39 - 40	10 - 27
	ク ヌ ギ	38 - 41	95 - 105	39 - 41	12 - 21
C	コ ナ ラ	38 - 41	97 - 105	39 - 40	11 - 27
	ク ヌ ギ	38 - 41	97 - 105	39 - 42	11 - 21
D	コ ナ ラ	38 - 40	100	39 - 42	17 - 30
	ク ヌ ギ	38 - 42	100 - 104	39 - 41	15 - 22

* 材の死滅処理：高圧蒸気（1.5kg / cm²、1時間）

** 無処理原木：伐採直後、玉切ったままの原木 原木の伐採・玉切り：S49 4 27
シイタケ菌糸の接種：S49 4 28 培養条件：25℃、12日間

(4) 原木の玉切り

一定期間葉枯し、適度に乾燥した原木から順次玉切りする。

ア 玉切りの適期

玉切りする前に、原木がよく乾燥しているかどうか調べる必要がある。

玉切りの時期の判定には次の方法がある。

- (ア) 木口のひび割れが、樹皮の近い部分に達する寸前の時期
- (イ) クヌギ、コナラの内皮が褐色になった時。
- (ウ) 小枝を折ってみて、折れ先がササクレ状になる。
- (エ) 小枝を燃やすと、褐色の樹液が木口からアワとなって出る時間。

イ 玉切りの寸法

寸法は、伏せ込み場、ほだ場の環境、伏せ込む配列、運搬などを考慮し、作業がしやすい寸法にする。

長さは、100～150cmくらいの範囲が手頃であろう。なお、伐採地で玉切りする場合搬出作業など考えて200～300cmに玉切りして、搬出した場所で更に玉切りする方法もある。

ウ 玉切りの際の注意事項

- (ア) 玉切りのときは、小径木は早く、大径木はその後にする。
- (イ) 玉切り後は、直接日光に長く当てないように、乾き過ぎに注意し、かさ木をかけるか木陰

に入れる。

(ウ) 玉切り後は、すみやかに植菌する。

(5) 購入原木

原木の調達は、しいたけ栽培の出発点となるので、慎重に行うことが大切である。特に、北九州地域で発生しているハラアカコブカミキリ等の病害虫発生地域からの原木購入は注意する必要がある。

原木を購入する際は、玉切り原木を買う場合と立木そのまま買って、自家労力で伐倒する場合がある。

ア 玉切り購入の場合の注意事項

(ア) 原木は、多少単価が高くなっても、原木の伐期、葉枯し、玉切り時期などを指定してから購入契約する。

(イ) 樹種、大きさ、本数、重量などを明確にしておく。

(ウ) 原木がよく乾燥されていない場合は、風通しのよい場所におき、直射日光にさらさないようにする。

イ 立木購入の場合の注意事項

(ア) 原木は、栽培地に近いところで購入する。遠方では、伐倒、搬出に不便で、日数、運賃もかかりすぎる。

(イ) 購入のとき、現地に行って樹種、樹齢、材積などを充分調査してから契約する。

(ウ) 購入場所が伏せ込み適地であれば、山主の了解を得て、伐採地に伏せ込むのが望ましい。

3 植 菌

玉切りが終われば、植菌にかかる。この作業は、原木に種菌を確実に移植することが目的である。

また、よいほだ木を作るためには、良い種菌を選び、その特性を生かした栽培法が重要となってくる。

(1) 品種の選定

品種を選定する場合は、品種の特性、発生時期、銘柄、気象、ほだ場などを考慮して選ぶことが大切で、特に、労力に見合った品種の組合せ、品種の特性を生かした栽培が重要であろう。

ア 品種の特性

よいほだ木を作るには、先に述べたように、よい種菌を使い、その品種の特性を十分には握し、理解することである。

品種は、しいたけ菌の発生温度によって分類される。

(ア) 高温性品種

発生温度（15～25℃）。自然発生は、秋に多く刺激がないと発生が少ない。発生の温度

の幅が広く、刺激を与えるとほぼ年間を通じて発生するので、生しいたけ栽培に適している。
他の品種に比べ腐朽が強く、ほだ木の寿命は短い。

(イ) 中温性品種

発生温度（10～20℃）。この系統は、温度変化、降雨などのわずかな刺激にも敏感で、きのこが発生する。

自然発生は、春、秋で特に、秋の発生が多い。発生期間はガラガラと長く、施設を利用しての生しいたけ栽培には不向きで、乾しいたけ栽培に適している。

(ウ) 低温性品種

発生温度（5～15℃）。自然発生は、春、秋で特に、春の発生が多く、集中的に発生する。乾燥用、促成、抑制栽培に適し、冬期のフレーム栽培によく使用される。他の品種より、腐朽力は弱い、ほだ木の寿命が長い。

イ 品種と発生時期

しいたけ菌は、発生の時期による違いで、次のような発生型に分類できる。これは、大きな特性であり、品種の組合せ上、考慮する必要がある。

(ア) 春出し

春に多く発生し、秋にまれに発生する。気温の低い早春から出るものと、暖かくなつてから出るものがある。

(イ) 秋出し

秋にも多く発生し、また晩春のころわずかに発生する。

(ウ) 春秋出し

春も秋も発生するが、一般に、春の発生量が秋に比べて多い。

(エ) 夏出し

夏秋出し、浸水その他発生操作によって、夏と秋口にかけて多く発生する品種である。

ウ 品種とほだ場

しいたけの品質は、発生時期の気温、降水量が大きく左右するので、ほだ場の条件をよく知り、それに対応できる品種を選ぶことが大切である。いくら発生量の多い品種を選定しても、その品種の特性に合わないほだ場環境では、品種の特性を十分に発揮させることができない。

(2) 種菌の管理

種菌は、栽培の基礎となるので、説明書をよく読んで、正しく取り扱いなければならない。なお種菌の取り扱いについては、次の事項に留意すること。

種菌が入荷したら、できるだけ早く、植菌作業にとりかかる。

種菌は、使用するまで風通しのよい、冷暗所に保管する。

種菌は、直射光線の当たる所や暖房器具などがある温度の高い場所にはおかない。

種菌は、農薬や肥料などと同じ場所に保管しない。

(3) 植菌作業

玉切りした原木が乾き過ぎても、菌の活着に影響するので、乾き過ぎないうちに、植菌作業に移るようにする。

ア 植菌の時期

植菌作業で大事なことは、適期を守ることである。植菌の適期は、大体2月から3月まで、暖くなると害菌の繁殖も強力になるので、ソメイヨシノが開花する、日平均気温12までに作業を早めに終わらせたい。また、秋季に植菌する場合は、11月下旬から12月上旬に作業をする。シイ・カシ類は寒伐りして、できるだけ早く植菌する。

イ 植菌の方法

植菌は、水分の早く抜ける小径木から始める。植穴は、一般に原木に対して横方向に6～7cm縦方向に20～25cm間隔（図6の通り）の千鳥植えとする。なお、最近鋸屑菌多孔植菌による方法が普及しはじめているが、その時は、横方向3～4cm縦方向15～20cm間隔の千鳥植えとする。

植え穴の深さは一般には約2cmであるが、大径木や樹皮の厚い原木ほど穴を深くする。穴が深いと駒の下のすき間にシイタケ菌が充満して、穴の深さと同じ長さの種駒を植えつけたのと同じ効果が出る。穴あけには、ふつう電気ドリルを用いる。深穴植え等には高速回転のドリルを用いるとよいが、そのときは高速ドリル用のキリ先を用いる。また鋸屑菌の穴あけには、より強力なドリルを用いる。

打ち込み方は、駒の場合後で雨みずがしみ込まぬよう、図7のとおり、樹皮と水平になるまで打ち込む。

鋸屑種菌の場合は、種菌は、塊のまま8分程度に詰め込み、図8のように種菌が乾燥しないようふた打ちをする。

ウ 植菌の量

植菌の数量は、原木の樹種、樹齢、玉切りの大きさ（径、長さ）などによって数量を決める。

植菌力所数が多ければほど付率がよく、早く完熟ほど木になるが、植菌の労力や植菌代も考慮しなければならない。

最近では、長さ100cm、直径10cmの原木で16～20個が標準（直径の2倍）となっているが、害菌予防やほど率を高めるために、切口や傷口、死節の周辺に1～2個余分に植菌する。原木代が高い現在、原木の有効利用面からも、標準より1～2割多く打ち込む方が得策であろう。（図9、10）

図6 植え付けの穴数と配列

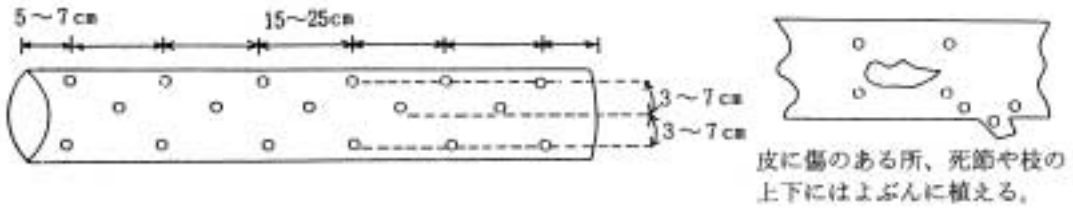


図7 種駒の植え方

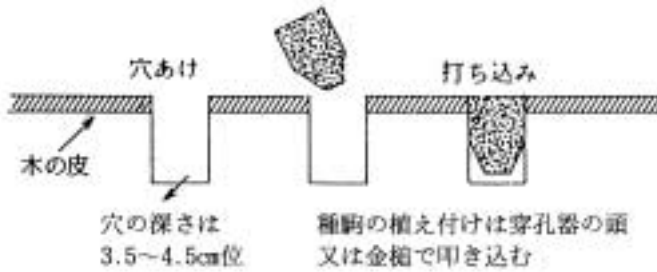


図8 鋸屑菌の植え方

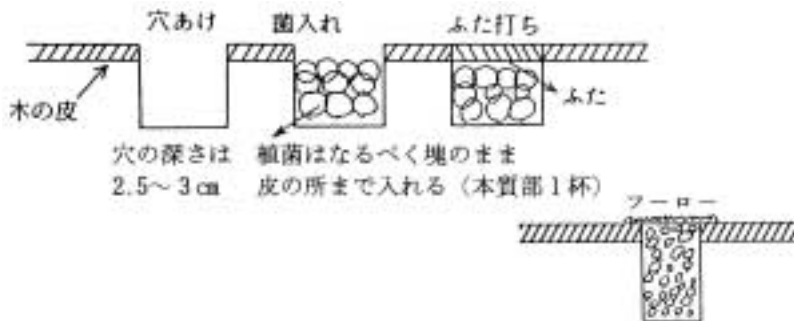


図9 原木1本当たりの植菌数と発生量 (S54~55)

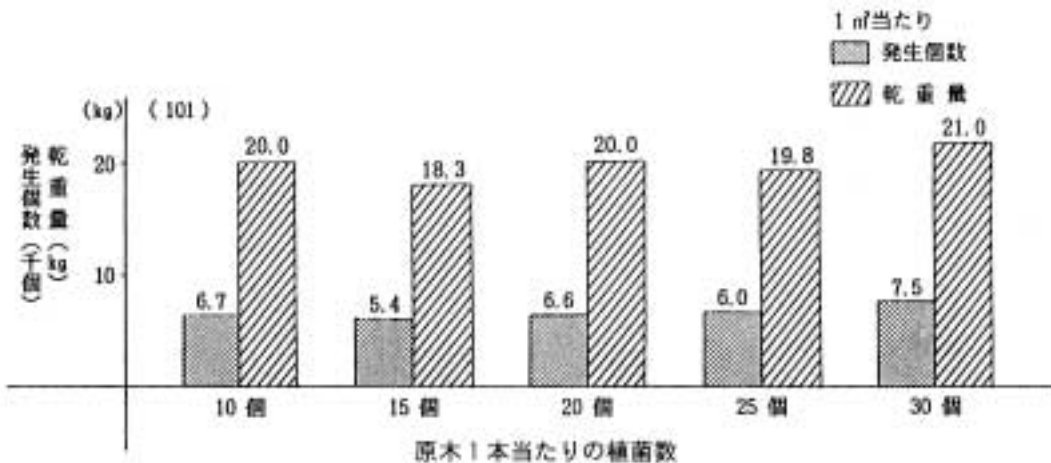
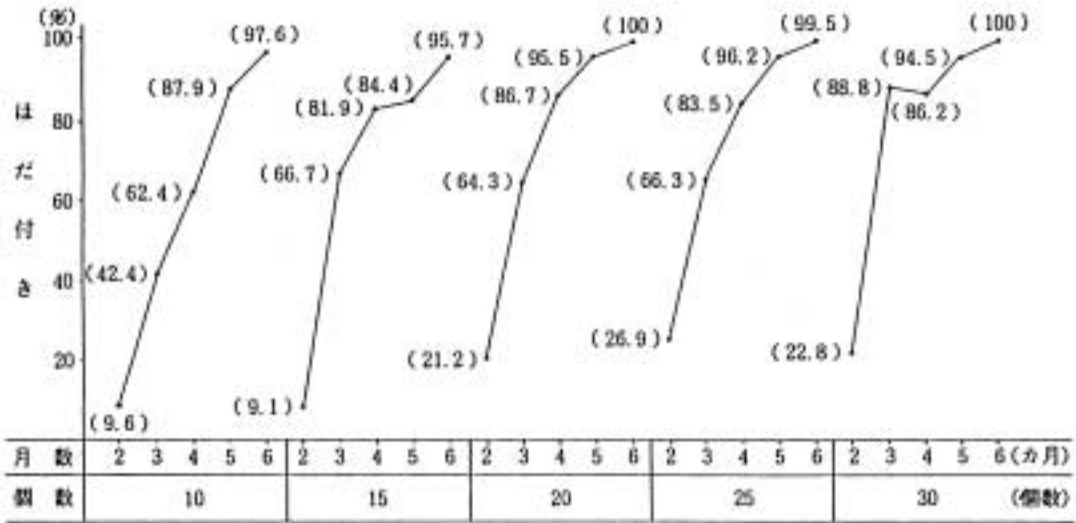
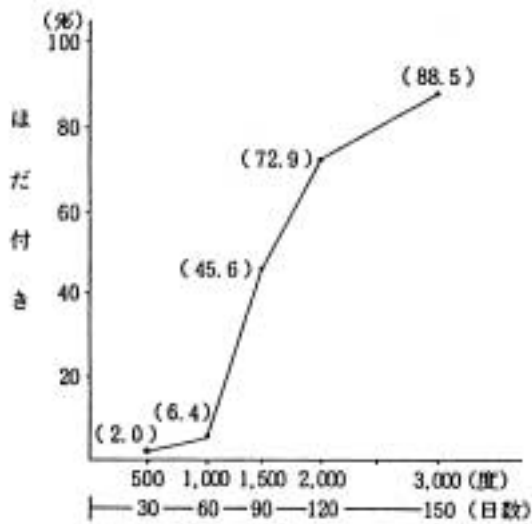


図10 植菌量とぼだ付き (S53~55)



経過日数と植菌量



積算温度と日数

エ 封ろう処理

植菌の乾燥や害菌防止に、封ろう処理も効果的である。封ろう処理の方法は、次のとおりである。

- (ア) ろうを適量に空罐に入れ、150~160 に熱し、白い蒸気がたつ状態で使用する。
- (イ) 別に鍋、洗面器などに熱湯を入れ、罐をその中に浸けておくと、融けたろうが固まらない。

- (ウ) 塗布するには、綿を小さくまとめて割箸の先につけるか、小形の塗料刷毛などで塗る。
- (エ) 温度が低いと、樹皮の種駒の頭に密着しないので、温度には十分気をつけ、十分密着させて封ろう効果を高める。

オ 植菌作業の留意点

- (ア) 植菌は、雨や直射日光を当てないように、天候や場所を考えて作業する。
- (イ) 原木に穴をあけたら、その日のうちに植菌し、穴をあけたままの状態に雨にあてない。
- (ウ) 鋸屑菌は、こまかく粉碎したり穴一杯につめこまない。種菌は、指先でかき取って、塊のまま植え付ける。
- (エ) 植え忘れのないように注意し、植菌の終わったものから順次伏せ込む。

カ 成型駒（オガ菌）の多孔植菌による乾シイタケ栽培

1 はじめに

最近、オガ菌の成型駒を従来の植菌数の約3 - 4倍植菌し、-夏経過後の11月下旬から翌年の3月頃にかけて高品質の乾シイタケを生産する方法が普及し始めている。この栽培方法の利点は、次の3点があげられる。

- ① 原木の有効活用：従来、一般に敬遠されていたクヌギ・ナラ・アベマキの大径木が活用できる。
- ② 高品質品の生産：晩秋から早春の寒冷期に生産されるため、大型・厚肉の高品質の乾シイタケ生産が可能である。
- ③ 早期発生早期収益：早生性の低中温性品種の菌を使用するため、早期発生と早期収入が可能である。

しかし、栽培経験の年数が少ないため栽培上の問題点の把握は十分ではないが、従来の方法にくらべ乾燥や害虫防除等に注意する必要がある。

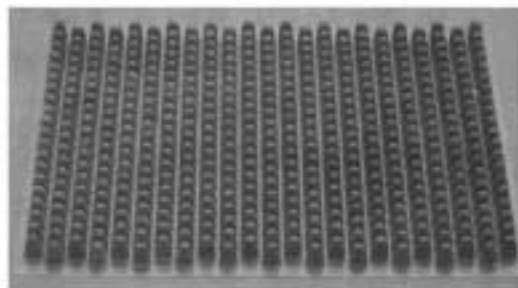
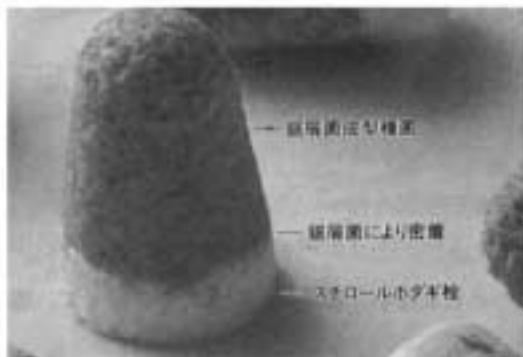
2 栽培方法

(1) 使用原木

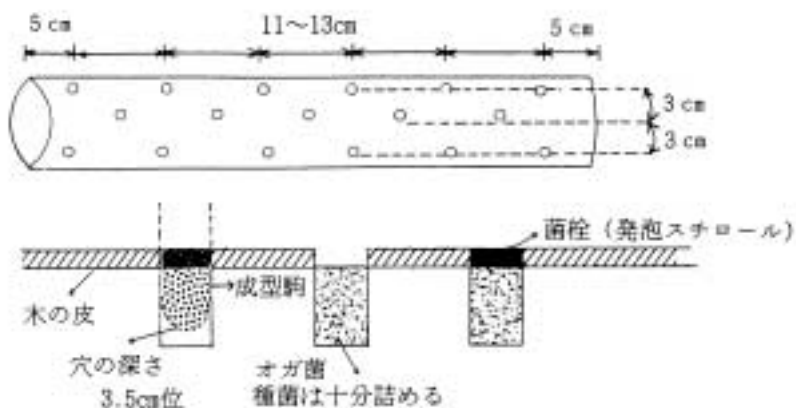
使用原木は、クヌギ・ナラ・アベマキの15cm以上の大径木を使用する。原木の伐採は、一般に10月中旬から11月中旬に行い、30日から40日乾燥後玉切りし利用する。しかし、オガ菌の多孔植菌であるため植菌後乾燥し易いので、2月頃までに伐採した生木状の原木も植菌可能といわれている。

(2) 植 菌

成型駒が配達されたら、その日に植菌を行う。成型シートから取りだした成型駒は、即植菌する。植菌数は、通常の約3 - 4倍とし、列間3cmの1列7 - 8個植えとする。穴の深さは、3.5cmとする。多孔植菌にすることにより、早期の菌回しが出来き害菌侵入を防除するとともに、1夏経過の晩秋より植え穴から早期発生となる効果がある。



穴の数と配列



(3) 仮伏せ

仮伏せは、植菌後、菌をほだ木に活着させるため重要な作業である。オガ菌は、種駒に比較して乾（低温）条件を嫌うので、活着を確認するまでは、保温保湿対策として50cm以下の低い棒積や束立てを行い、その上を笠木やコモ等で覆い、植穴部の乾燥を防ぐようにする。とくに葉枯らしを行った原木や風当たりの強い場所などでは徹底して行う。方法は種駒の場合と同様でよいが、風をささげりできるだけ雨が均一に当たるように工夫する。仮伏せの期間は、材部の伸長と木口の菌糸紋を確認するまでとし、遅くとも4月中旬（日最高気温が15℃になる頃）までとする。

仮伏せ方法

ビニール・コモ 束立て



林内

裸地



天白糸の良品に生育した115日号

(4) 本伏せ

原則として、原木に菌の活着を確認してから本伏せを行う。

① 林内伏せ

ムカデまたはトリイ伏せの、低伏せとする。ほだ木の間隔は、晩秋には発生があるものとし、また袋掛けなどの作業も考慮して広くすることが大切である。

また、晩秋の発生期までほだ木を動かすことがほとんどないので、この時点でほだ木の高さ・間隔を最終決定する気持ちで行う。

管理作業は、種駒の場合と同様でよいが、とくに植穴部の乾燥に注意し、日差しや通風の状況をこまめにチェックする。

② 裸地伏せ

林内伏せに比べ、環境条件は良好で、比較的害菌の発生の少ない良好なほだ木作りが可能である。

管理作業は、種駒の場合と同様でよいが、とくに植穴部の乾燥に注意し、日差しや通風の状況をこまめにチェックし、直射日光が当たる場合は庇陰する。

(5) 害虫と野鳥の防除

① 害虫の防除

発泡スチロール栓を使用した成型駒の場合、伏せ込み中に栓から害虫が侵入して、植孔部からのきのこの発生が望めないことがある。

この害虫は「シイタケオオヒロズコガ」といい、成虫は年2期にわかれて発生し、最盛期は6月と9月である。成虫は夕刻から活発に飛翔するが、日中はほだ木の陰、草むら、寒冷紗の陰などのやや陰湿な場所に静止している。卵のほとんどは地上に産卵され、一部はほだ木の樹皮表面の割れ目や種菌付近に産みつけられる。1雌の産卵数は数百個、ふ化率は80%程度、産卵後、約12日間でふ化し、約15日から20日間後幼虫がほだ木に侵入する。侵入した幼虫は、樹皮の割れ目に長さ1.5mm前後の樹皮と同色の筒を糸で作成し、ここより虫糞を排出する。この排糞は被害発見の目印とされる。年内は、ほだ木の食害は目立たないが、翌春になると盛んになる。この時期、生息密度の高いほだ場では子実体も加害する。種駒数を増加させると被害が増えるようである。

防除方法は次のとおりであるが、健康食品としてのイメージを損なわないよう薬剤による防除はさけることが望ましい。

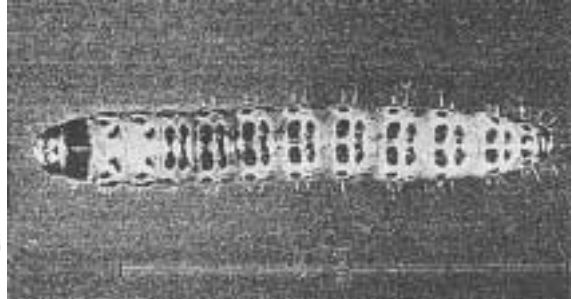
ア ほだ木内に侵入した幼虫を駆除するより、新生幼虫の侵入から新植ほだ木を守ること(予防)に主眼を置くようにする。

イ 古い伏せ込み場は、この虫の発生源となるので、出来れば新しい伏せ込み場にする。ほだ木の選定に当たっては、2 - 3年ほだ木が周囲にないこと、過去に虫の発生したほだ場がないことに注意する。

ウ ほだ木の周辺の通風を良くし、虫の隠れ場所を作らないようにほだ木を粗く組むとともに、晩春に発生したきのこを完全に採取し、ゴミ山や廃ほだなどを除去して清潔な明るいほだ場にする。



シイタケオオヒロズコガ



シイタケオオヒロズコガの幼虫

② 野鳥の防除

発泡スチロール栓を使用した成型駒の場合、カラス等の野鳥が発泡スチロール栓をついばみ、害虫の場合と同様に植孔部の発生が望めなくなる。特に、植菌直後の春から初夏の被害は、シイタケ菌の活着、伸長が困難となり、ほだ木作りそのものに悪影響を及ぼす。

防除方法としては、植菌終了後ただちに、野鳥のくちばしがほだ木に届かないように笠木で被覆する。林内伏せにおいても、薄く笠木(木の枝や竹の枝等)を掛けて、野鳥のくちばしがほだ木に届かないようにする。

(6) ほだ場の選定とほだ起こし

1 夏経過後、シイタケ菌が蔓延したほだ木は、ほだ起こしを行い、シイタケの発生に適したほだ場に移動する。

ほだ起こしの時期は、発生の始まる1日の最低気温が5 以下になる頃の約1月前の10月下旬頃を目安とすると良い。ほだ場の条件は、種駒の場合と同様でよいが、散水が出来る所で、道路と乾燥場に近い、管理の容易な場所が良い。

(7) 発 生

発生操作は、最低気温が8 以下の日が続く11月中旬頃、発生用の散水を行う。発生は、1日の最低気温が5 以下になる11月の下旬ころから始まり3月まで連続的に発生する。寒期に発生した物は、袋掛けにより生長させる。袋掛けは、大型きのこを作るための重要な作業であり、発生したシイタケが親指大になると行う。

(8) 採取と乾燥

成型駒の多穴植菌による乾シイタケ栽培は、高品質の大型きのこを生産することを目標としているので、採取に当たっては、5 - 6分開きのドンコと6 - 7分開きのコウシンになるよう早めの採取に心掛ける。また、乾燥に当たっては、大型の厚肉であるので芯まで十分乾燥するよう注意する。